

「聖霊に満たされることを願って」

創世記 11章4～7節 使徒言行録 2章1～11節

政治経済学部特任チャプレン・総合研究所特任教授 洛雲海(ナグネ)

人とコミュニケーションがうまくいくことは嬉しいことです。皆さんも人と意志の疎通がうまくいくことを願われることでしょう。でも、それがうまく行かないことがあります。言葉が通じない。相手が外国人でなくとも、同じ国の人同士でもうまく通じ合えないことがある。相手は私の言葉を聞きとっているはずなのに、私が何を言っているのか分かってくれない。それどころか、私の言うことを分かってもらってほしい時だってある。逆に、私の方が相手の言うことを分かってもらってほしいこともあるでしょう。それに気づけば、愕然(がくぜん)とします。あの人のことが理解できないのです。本当は、理解したくないのかもしれませんが。私たちの悲しい現実です。

世界は誤解に満ちています。その時は理解していると思っても、後でそれが誤解だったと分かることがどんなに多いことでしょうか。まるで「理解は誤解」であるかのようです。親しかった人との信頼は一瞬にして崩れ、衝突が起こり、争いは絶えず、戦争にさえなります。

なぜあの人のことが理解できないのでしょうか。なぜあの人とのコミュニケーションがうまくいかないのでしょうか。それは愛が欠けているからでしょう。バベルの塔の物語を想います。なぜ世界は互いに言葉が通じ合えなくなったのか。それは、人間が「天まで届く塔のある町を建てよう」としたから、そして「有名になろう」としたからだということです(創 11:4)。つまり、高く高く上へ上へと上がろうとしたからだということです。

要するに、人は天にまで届こうとし、神さまに近づこうとし、神になろうとしたのでした。人が神になるなど不可能です。しかし、人間はその不可能に挑戦しました。すると、言葉が混乱したのでした。他者とのコミュニケーションは難しいものとなりました。当たり前です。言葉が通じないのですから。神になろうとする人たちは、皆、自分が絶対正しいと思っています。いつでも相手が間違っている。そこに愛はあるのでしょうか。ないでしょう。だから言葉が通じないのです。

しかし、このような世界を神さまは愛してくださいました。ひとり子なるイエス・キリストを世に送り、また聖霊を送ってくださいました。ペンテコステの日でした。集まっている人々の上に聖霊が降ったそうです。すると何が起こったか。舌が動き出し、言葉を語り始めたのです。ほかの国々の言葉でした。外国から来た人々にも分かる言葉でした。ここに、バベルの塔以来不可能となっていた人間同士の意志疎通が可能となる世界が回復し始めました。これこそは、ペンテコステの日が起こった聖霊の出来事

でした。

聖霊に満たされた人は愛に満たされた人です。聖霊は愛の霊だからです。愛に満たされた人は、自分の言葉に固執しません。むしろ自分とは違う言葉を使う人々へと向かって行き、語り始めます。他者を理解しようと努めます。相手が「何を言っているのか分からない」といって切り捨てたりしません。むしろ、相手が言おうとしていることを理解しようと努めます。そればかりか、相手に分かってもらえる言葉を探します。聖霊に満たされた人は自分の言葉にこだわりません。むしろ、相手の言葉を使って話そうと努めます。

大切なのは愛です。ただしその愛は利己的自己愛ではありません。利他的他者愛です。他者を生かすために自分自身に死ぬ愛です。人間にはほとんど不可能な愛です。しかしイエス・キリストは愛を生き、死なれました。世のため、私たちのためでした。このイエス・キリストもお受けになった霊が聖霊です。聖霊は愛の霊です。愛の霊を求めつつ、言葉を語るのです。きっと誤解は解けるでしょう。

聖霊に満たされた人たちの言葉は、外国から来た人たちに理解されました。そこにはパルティアからアラビアに至るまで、「天下のあらゆる国から」人々が集まって来ていたそうです。その人たちが「だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話をしているのを聞いて、あつけにとられてしまった」(2:6)のだそうです。

それだけでなく、諸外国から来た人々はこうも言ったそうです。「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」(11 節)と。彼らは「わたしたちの言葉で語っている」と言えるほどの言葉を聞いたのです。それは、単に外国語で語り始めたということ以上のことでしょう。それは、語る人が自分の言葉を放棄して、相手の言葉で語るということ。これは愛なくしてはできません。

聖霊に満たされた人は、相手の言葉で語るように努めます。相手のためです。難しいことですが、愛の霊、聖霊によればできるでしょう。愛は相手を見捨てません。

さて、相手がわたしたちの言葉を聞いて「ああ、これはわたしたちの言葉だ」と思ってくれるなら、どんなにすばらしいことでしょうか。相手はあなたの言葉を理解してくれることでしょうか。海外に派遣された宣教師たちを思います。外国の地に入って行って、宣教師が最初にすることは何でしょうか。現地の人々の言語を学ぶことです。現地の人々の言葉で福音を伝え、コミュニケーションするためです。理解してほしいからです。だから、どんなに辛くても、まず現地の人々の言葉を学ぶのです。

留学生の皆さんのご苦勞を思います。外国の地、日本に来て、日本語を学び、日本語で授業を受け、日本語で生活しておられます。私も昨年までの 22 年余り、海外で生活していた者ですので、そのご苦勞は分かるつもりです。留学生の皆さんを大切にしたい聖学院大でありたいと思います。

頭だけでなく、心でも理解してもらえらる言葉を話すために必要なのは、相手を思いやる心、愛です。愛は相手の言葉で話そうとします。人間同士のコミュニケーションは単に論理や理屈だけでなく、靈性に深く関わっています。被造世界のあらゆる生命体とのコミュニケーションも同様でしょう。もちろん、論理や理屈も大切です。しかし、真実なるコミュニケーションの成立根拠は、冷徹な論理よりはむしろ心温まる愛ではないでしょうか。聖靈はバベルの塔以来続く人間の自己絶対化＝自己神化的状況を打ち砕く愛の靈です。聖靈は、人間同士、互いに不可能となっている意思の疎通を再び可能にしてくれる回復の靈です。しかも外国語を用いてさえそれをなし遂げる靈です。

聖靈に満たされるとは、愛に満たされることです。愛に満たされれば憎しみは消え、相手を見無視することは無くなり、対立よりは一致を目指し、和解が起こり、難しかったあの人との意志疎通も可能となることでしょう。そして、相互理解と喜びと感謝に満ちた人生になることでしょう。それは人間には困難であっても、神さまがそうしてくださるのです。だから、聖靈に満たされることを祈り願いましょう。そして、私たちの外に出て行くのです。

2022年6月9日 聖学院大学 全学礼拝 ペンテコステ礼拝